編集者
（編集長）
篠原
（編集）
竹中 久保 稲垣
菊地 齋藤

駒場高校新聞
THE KOMABA HIGH SCHOOL NEWS

２０１７年１月６日（金）発行　特別号
目黒区大橋2の18の1　TEL（3466）2481　都立駒場高校新聞局
新聞局ＨＰ：www.komaba-h.metro.tokyo.jp/site/zen/content/000027120.pdf

特別号

「飽きっぽい」人々は世界初の芸術を生んだ

確かな技術力と鋭い観察眼

↑唯一精巧な作りだった、日本初公開の貴重なランプ

10月31日、ラスコー展報道内覧会を取材した。

この特別展のタイトルにもなっている、フランス南西部の「ラスコー洞窟」。中の壁画は最高傑作といわれ、世界遺産にも認定されている。では、この壁画を描いたクロマニョン人はどんな人々だったのか。

クロマニョン人は、今から4万～1万数千年前にアフリカからヨーロッパへと移動してきた移民だった。私たちと同じホモ・サピエンスに分類され、ヨーロッパ人の祖先の一部である。

↑ヴィーナス

彼らの技術や観察力は高かった。今とほぼ変わらない形の縫い針を作り、服を作ったという。針の材料は動物の骨で、それを削り、片方の先端に穴をあけて作り上げた。身を飾る習慣もできたようで、貝のビーズで作られた帽子を被った人骨も発見された。また、それまで槍は動物に直接刺すものだったが、離れた場所から飛ばすようになった。そこで、より遠くまで槍を飛ばすために投槍器（とうそうき）を作った。持ち手にはハイエナのような動物やウマなどの彫刻が見られる。

たてがみを表す線の細かさが特徴の「体を舐めるバイソン」や、大きさ数センチだが、丸みが滑らかに表現されている「ヴィーナス」にも注目だ。これらの彫刻は、写実的で洗練されている。

そして、最も外してはならないだろう赤色砂岩製の「ランプ（写真左上）」が、日本初公開される。国立科学博物館の海部陽介さんが「まさか（フランスが）貸してくれるとは思わなかった」と言うほど貴重なものだ。これは、真っ暗な洞窟で絵を描くためクロマニョン人が使った灯りだ。他のランプは粗雑なつくりをしていたが、これだけは精巧に作られている。燃料を置く場所の丸みは歪みがなく、当時の技術力の高さがはっきりとわかる。

このように、クロマニョン人は確かな技術力を持つ創造的な人々だった。そして彼らは新しいものを次々と生み出したが、前のスタイルを繰り返すことはなかった。一方、クロマニョン人の前に存在したネアンデルタール人は伝統を重んじる部分が多く、同じ生活を続けた。また認知能力の発達もしていなかった。そのため環境変化に対応できず、絶滅したとも考えられている。この点ではクロマニョン人は有利だった。

このようなクロマニョン人を、東京大学総合研究博物館の佐野勝宏さんは「飽きっぽい人々だった」と表現する。しかし、新たなものを作り続けると、新たな問題を生み出すことにもなる。「これは今の人類と同じだ」と佐野さんは語った。

今の人類は誰しも絵を描く。世界で初めてクロマニョン人が絵を描き出したなら、世界各地に散らばった、クロマニョン人の先祖であるアフリカの人々は、絵を描く能力を持っていたことになる。その人々は全人類の祖先の一部とも言えるかもしれない。ということは、この「飽きっぽい」性格が今の人類に受け継がれていても不思議ではない。

↓発掘人骨を基にしたクロマニョン人の復元模型

©SPL Lascaux international exhibition

ぜひフランスにも！

←テープカット

報道内覧会後には、駐日仏大使やラスコー洞窟のあるドルドーニュ県の県議会議長などの方々が出席し、開会式が行われた。駐日仏大使は「ラスコーを見るために現地に行く必要はないが、私としては逆に、美しい地域の現地に出かけてそこの環境を感じ、より理解を深めてほしい」と話した。

行ってこその研究

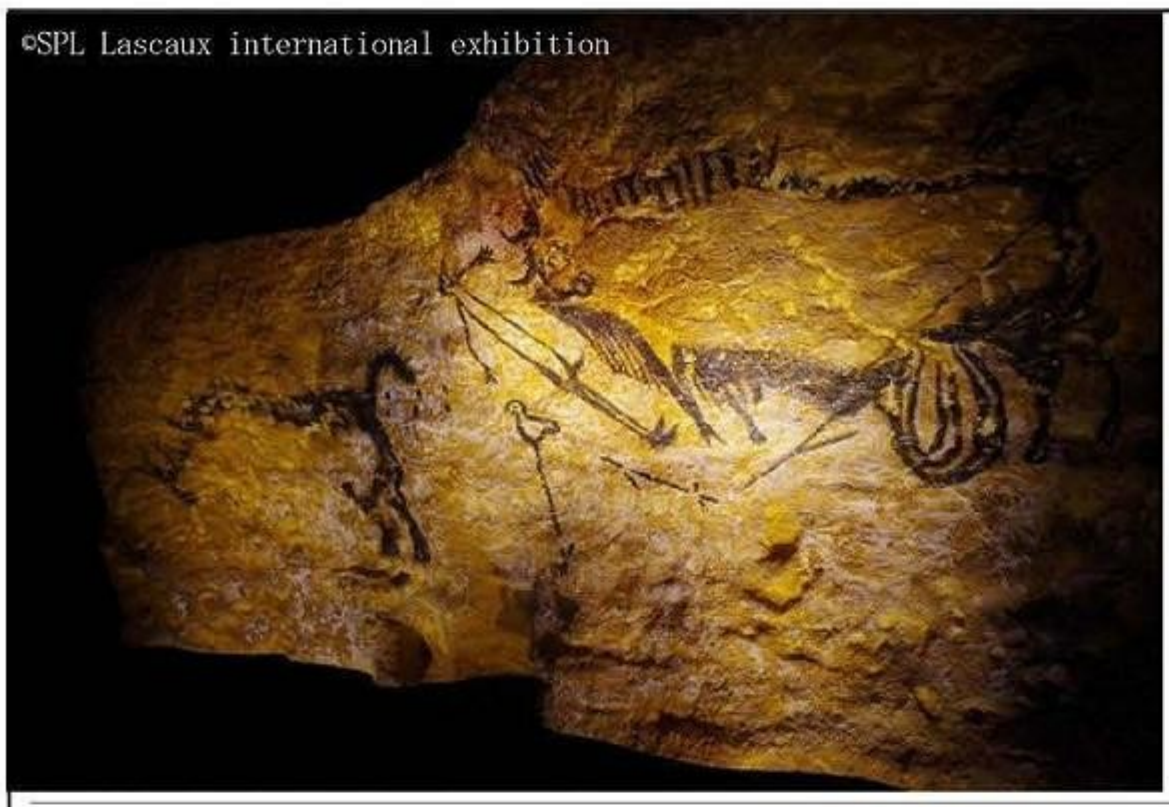
ラスコー展に学術協力として携わった東京藝術大学の五十嵐ジャンヌさんに、洞窟壁画を研究することになったきっかけを伺いました。

「私は東京藝大生だったのですが、専門を選ぶとき、そもそもなんで美術って始まったんだろうっていう素朴な疑問を持ちました。それですぐ気づいたんですよ、たまたま残っているのが洞窟壁画だって。洞窟壁画って普通の美術と違ってその場所に行かないと見られないじゃないですか。それが大変なんですけど、でも面白いって思いました。だから美術の起源はちょっと置いといても、洞窟をいっぱい見たいなって思い始めて。それから何度もフランスを訪ねて、自然史博物館で調査もしました。少し成り行きって部分もありますが、その魅力に知らず知らずのうちに取り憑かれたっていう感じです」。

洞窟壁画がもつ不思議な魅力を、この特別展を通じて感じてほしい。

←右：五十嵐さん

謎だらけの壁画たち



←謎が多い「井戸の場面」

◇一番の謎・鳥人間

さてラスコー洞窟の壁画だが、謎に包まれたことが多い。その筆頭は、井戸状の空間。地表からの深さは約20メートルで、ラスコー洞窟の中で最も深い位置にある。そこに描かれた壁画は少ないが、「井戸の場面」と呼ばれる壁画がある。それにはバイソンとサイ、そしてラスコー洞窟で唯一のヒトが描かれている。しかし、このヒトはただのヒトではない。頭と手の形が鳥のような、いわば「鳥人間」といった風貌をしているのだ。右のバイソンは腸が飛び出しているが、他の場所に描かれた動物たちと違い、頭と尻尾しか躍動感を感じられない。左のサイはそもそも何を意味しているのかが不明であり、さらに尻尾の下には規則的に描かれた六つの黒い点もある。そして、全て黒一色で描かれているのも他との大きな違いだ。また、1面で紹介した精巧な作りのランプや、本来洞窟内に持ち込むことはない狩猟道具も見つかっている。この場所はどんな意味を持ち、どのような人が立ち入ったのか。この絵は何を意味しているのか。クロマニョン人が生存していない今、謎は深まるばかりだ。

ちなみに、サイと六つの点は別の人が書いたと分析されている。画材が筆から綿状のスタンプになり、違うマンガン顔料が使われているからだ。他の絵でも、書き直しや重ね書きがされているものもある。このことから、見ることではなく書くことが目的としてあったのではないかと推測される。

◇なぜ洞窟に入る

現在私たちが入れる洞窟は道や明かりが整備されているため忘れがちになってしまうが、本来洞窟は真っ暗なものだ。だからネアンデルタール人は、洞窟の入り口で生活していても中には入らなかったし、クロマニョン人も生活の場は洞窟の入り口までだ。それなのに、なぜ洞窟に入り、なぜ突如として絵を描き始めたのか。研究は続けられている。解明されることを期待する。

→泳ぐシカ

まだまだ続く、魅力発見の旅

特別展　世界遺産 ラスコー展

会期：2016年11月1日～2017年2月19日

開館時間：9:00～17:00(金曜日は20:00まで)。入館は各閉館時刻の30分前まで。

入場料：一般・大学生1600円、小・中・高校生600円

放映された番組

１２月４日 16:30～　超歴史潜入捜査！ラスコー　古代人が残した洞窟壁画のミステリー（ＴＢＳ）

レプリカ洞窟の続編・「ラスコー４」開館！

２０１６年１２月１５日、ラスコー洞窟のあるドルドーニュ地方に、「モンティニャックラスコー国際洞窟壁画芸術センター」が開館される。またの名を「ラスコー４」。映像やバーチャル技術を使って解説される。ラスコー４では初めて洞窟全体が複製され、全長１５０ｍ・奥行き７０ｍ・高さ８ｍの壮大なスケールが特徴。

ラスコーの洞窟壁画の歩み

洞窟壁画の発見そして閉鎖

76年前の１９４０年９月８日、マルセル＝ラヴィタ少年の飼い犬が穴へ落ちてしまった。秘密の地下通路を発見したと思った彼は、４日後の９月12日に友人ら３人と共にランプを持って、穴を広げて中へ入った。するとどうだろう、無数の古く、美しい壁画が描かれていたのだ。ラスコーの洞窟壁画の発見である。

この話は瞬く間に世界中を駆け巡り、多くの人々が訪れた。それにより混乱が生じたため、洞窟は一時的に封鎖されるほどだった。電気照明や床などの大規模な整備の後、１９４８年に再び洞窟が公開され15年間で１００万人以上が訪れた。しかし、１９５０年代には壁に緑や白、黒色をしたシミが発生。シミは１９６３年にフランス政府がラスコー洞窟を閉鎖するまで改善されることはなかった。シミの主な原因は、訪れた大勢の人の出した二酸化炭素やバクテリア、菌類が洞窟内で増殖したことであった。ラスコーの洞窟壁画はもう直接見ることができないのである。

複製洞窟ラスコー２・３

しかし、閉鎖してもなおラスコーの洞窟壁画を見たいという声は後を絶たなかった。そこで、ラスコー洞窟のすぐそばに再現壁画が作られた。１９８３年に完成した「ラスコー２」だ。

ラスコー２は作成に10年が費やされ、手作業による測量と模写が行われた。「牡牛の広間」と「軸状ギャラリー」を再現している。

今回の「ラスコー展」では「ラスコー３」が展示されている。ラスコー３はラスコー２と違い、本体の移動が可能となっている。ラスコー３は何人もの腕利きのアーティストだけでなく、最先端のテクノロジーである「３次元レーザースキャン」が用いられている。洞窟再現の精度は１ミリメートル以下となっており、絵を正確に配置するためにデジタルマッピング技術が応用された。実物さながらの迫力だ。

さらにラスコー３の凄いところは線刻画の再現・表現度の高さだ。色が付けられていたり、洞窟内の壁と同化していたりと輪郭がよく見えない絵もあるが、特殊照明を当てることではっきりと浮かび上がらせることができるのだ。展示では、照明が点いた状態の壁画とブラックライトを当てた状態の壁画の２種類を一定間隔で切り替えている。

また、ラスコー２・３に続き、ラスコー４の制作も行われている。詳しくは、上の記事「まだまだ続く、魅力発見の旅」を参照のこと。

↓特殊照明で浮かび上がった線刻画